



# JACET通信

大学英語教育学会

January 2000

The Japan Association of College English Teachers

No.121

## 【巻頭言】

## 2000年を迎えて

会長 小池生夫

皆様、あけましておめでとうございます。時期的に少し遅くなりましたが、やはり年頭のご挨拶とさせていただきます。

昨年前半はわれわれは緊張の日々で世界大会の準備に没頭いたしました。8月を迎え、大会を見事に成功させました。この成功は、第1にこの巨大な大会運営をスムーズにおこなえたこと、第2に黒字になったこと、第3に大会のための犠牲者がひとりも出なかったこと、第4に協力してやれば、われわれはできるのだという自信がついたこと、を意味しています。われわれはこの成功を一回は自画自賛してよいでしょう。

20世紀の最後の年、紀元2000年は、21世紀というまだ見えない未来への橋渡しの年として格別の意義をもつものです。それに合わせるかのように、社会変化は著しく、大学の環境も急激に変わりつつあります。大学でわれわれが活動している分野、外国語教育、英語教育も同じ状況にさらされています。多くの人びとはそのただ中であって、かつて経験しなかった大学生存競争という大きな流れに入っています。われわれは、いまやこの大問題と正面から向き合い、どう改善するかを自らに問いかけ、その方向を社会にアピールしなければなりません。

最近では、日本人は国際競争社会で自己を主張するにも、外国語、とくに英語力が低いという批判が、テレビ、新聞、雑誌などによく見ら

れます。これは前からあった現象ですが、今回は政治家、実業家、評論家、行政担当者などが口をそろえて批判し、政府も審議会をつくって21世紀の国際社会に生きる人材の養成を訴えているのが、特徴です。この流れの中で当の責任者である英語教師はほとんど反応を示していないという声があります。

JACETは普通の学会とは趣を異にしています。それは英語教育の改善をあくまで追及するための研究団体であり運動体でもあります。このように考えてきた時、まず必要なことは日本の大学を中心とする学校教育での外国語教育的確な実態把握であります。われわれは10年前にすでに大規模な実態調査をし、その報告書の影響は大きなものがありました。しかし、その当時は大学改革の初期であり、現在とは相当に実態が異なっていると想像されます。私はこれをふたたび行って実態を把握することから改革をはじめようと提案します。そのための活動を開始します。会員の皆様、どうかこれにご協力をお願いいたします。その結果に基づいて実態の裏に潜む根源の理由を探り出さなければなりません。そのうえで、改革を実行に移すことにしたいと考えます。

また、ほかにも考慮する必要がある問題が山積しております。皆様の協力を得て着実に前進したいと願っております。

## 事務局より

代表幹事 神保尚武

1999年度の年次大会以降の主な動きを報告いたします。

<9月>

1) 臨時事務員の石井友子氏 (AILA 予算) は 8 月 17 日に、長谷川祐佳氏 (JACET 予算) は 9 月 11 日に退任した。

2) 人事異動の件：天野一夫顧問が 4 月 10 日に逝去されたので、顧問を退任された。高嶋稔評議員が退会したので、評議員を退任された。

3) 第 39 回全国大会 (沖縄) の件：年間計画が策定され、発表応募締切日は 2000 年 5 月 1 日 (消印有効) になった。テーマは「東アジアと 21 世紀の英語教育」(English Education in East Asia for the 21st Century) となった。

4) 「日本外国語教育改善懇談会」への代表派遣の件：世話人代理の加藤氏より最近の動きの説明があり、継続して代表を派遣したらどうかとの提案があったが、反対意見が強く、諸般の事情から今後は代表を派遣しないことと決定した。

<10月>

1) JALT25 回国際大会が 10 月 9 日-11 日に前橋で開催された。1800 名近くの参加者があり、盛会であった。日本人の参加者は 1 割程度であった。会長の Gene van Troyer 氏が 2 期 4 年を終了し、辞任した。来年度の大会は 11 月 3 日-5 日であり、JACET 大会と重なる。

2) 人事異動の件：寺澤芳雄評議員の退任願いと吉岡元子氏の評議員と大学英語教育学会賞選考委員の退任願いを審議し、了承した。

3) 学術情報センターとの覚え書きの件：懸案となっていた非会員の資料 (著作権) 使用料を印刷した時のみ一律 10 円とすることが了承された。

<11月>

(1) 学術情報センターと「電子図書館」に関する覚え書きを取り交わした。

2) 名簿が完成し、大会発表募集要項と F D セ

ミナーの案内を同封し、月末に発送した。

3) 第 39 回全国大会 (沖縄) の件：基調講演者に法政大学名誉教授の外間主善氏が推薦され、了承した。

4) 11 月 16 日-18 日に開催されたインドネシアの TEFLIN (非公式な交流団体) の大会に古谷千里幹事が代表として参加した。

5) 11 月 13 日 (土) 13:30 - 15:30 に日本音声学會主催、JACET 後援の特別講演会が開催された。講師はロンドン大学の J.C.Wells で演題は "Phonetic Characteristics of Connected Speech" であった。

6) 海外国際交流学会大会代表派遣の件：2000 年 2 月に開催される KATE の大会に九州・沖縄支部長の名本幹雄氏と木下正義理事を派遣することとなった。

<12月>

1) 12 月 11 日 (土) に Dr. G. Leech の特別講演会が開催された。演題は "Politeness and Pragmatics: A Reconsideration" であった。

2) 第 39 回全国大会 (沖縄) の件：基調講演者に KATE の会長の Dr. Lee Heung-Soo が推薦され、了承された。

3) FD セミナーの件：「カリキュラム改革とテスト内部テストと外部テスト」をテーマに 12 月 24 日に東洋大学で開催された。講師は久保田章 (筑波大学)、守屋康代 (国際基督教大学)、高木道信 (千葉商科大学)、各テスト団体の代表者 (TOEFL、英検、JACET リスニングテスト) であった。参加者は 40 名ほどであった。

4) 海外国際交流学会大会代表派遣の件：2000 年 4 月に開催される RELC のセミナーに田辺副会長と関西支部長の豊田昌倫氏を派遣することとなった。

<電子図書館の利用について>

紀要と大会要綱が検索できます。利用申請についてのお問い合わせ先は次のとおりです。

〒112-8640

東京都文京区大塚 3-29-1

学術情報センター管理部共同利用課

電話：03-3942-6933

FAX：03-3942-6797

E-mail: kyouri@ad.nacis.ac.jp

ホームページ：http://www.nacsis.ac.jp/els/els-j.htm

# 支部便り

## <北海道支部>

### —今年度のまとめ—

北海道支部一年のまとめの第一は AILA'99 への積極的な参加を目標にした点である。支部からの寄付に取組むと共に、支部大会の日程を例年の夏季開催から6月に移し会員諸氏が AILA'99 に参加し易いようにした。それにより遠方ながら60名を越す会員や院生、研究生が参加、研究発表やポスターセッションは延べ24名にのぼり、さらには基調講演の司会者、大会各委員会での仕事等に多くの会員が協力する事ができた。まとめの第二は初めて支部大会を札幌以外の地で開催した点である。旭川での大会は会員諸氏のもとより、数多くの地元の方々の出席を頂戴し、研究発表も倍に増えて盛況を呈し、成功裏に終了した。今年は支部活動に大きな自信と弾みをつける一年であったと総括している。

### —9月～12月の活動状況—

#### 1. 研究例会

日時：11月23日(火) 13:00-16:00

場所：北海道大学

講演：言語テキストと言語教育—テスト得点の視点から

講師：大友賢二(常磐大)

ワークショップ：スピーキング能力測定のあり方

講師：中村優治(東京経済大)

本例会は外国語評価学会との共催で行われたが、関心の高い内容とあって多数の参加者があり、活気溢れる研究例会となった。第2回研究例会は2月19日に講師神久聡氏(北海道薬科大)による「ESP サポートへの一歩」を予定している。

#### 2. 運営委員会

第2回運営委員会を2月19日に予定している。

#### 3. ニュースレターの発行

第13号の編集を進めているところである。

(西堀ゆり・北海道大)

## <東北支部>

### 1999年度第4回役員会

日時：10月23日(土) 12:00-13:45

場所：東北学院大

議題：今後の活動、新研究会(早期英語教育研

究会・リテラシー研究会—読み・書きの認知心理学の立場から・コンピュータを使った英語研究と教育)設立について(継続審議)、その他  
例会

日時：10月23日(土) 14:00-17:00

場所：東北学院大

シンポジウム「高校英語教育の問題点と展望」

司会・講師 宇都宮満(宮城県第一女子高)

講師 福地和則(仙台電波工業高専)

原田美帆(宮城県仙台東高)

柴崎隆浩(宮城県第三女子高)

助言 高梨庸雄(弘前大)

文部省告示(平成11年3月)の新高等学校学習指導要領の実施に先立ち、現在の高校英語教育がかかえる問題点をどのようにしたら解決できるのかという観点から幅広く高校英語教育を論じ、高校生に望まれる英語の学力の定着を図るための指針や展望を探った。

### 1999年度第5回役員会

日時：12月4日(土) 12:00-13:45

場所：東北学院大

議題：役員推薦、2000年度支部活動計画日程案、新研究会設立、その他

#### 例会

日時：12月4日(土) 14:00-16:00

場所：東北学院大

#### 発表

(1) 宮曾根美香(東北工業大)

「ライティングにおける cohesion と coherence に関する一考察」

(2) 佐藤一昭(いわき明星大)

「日本人の英語教育—英文読解におけるストラテジィ」

・『JACET 東北支部通信』No.21は2月発行予定。

(村野井仁・東北学院大)

## <中部支部>

### 講演会開催

日時：1999年11月10日(水) 14:00-15:30

場所：名古屋外国語大学

講師：John C. Wells 教授 (University College London)

演題：New Trends in British English Pronunciation

主催：名古屋外国語大学

共催：大学英語教育学会中部支部英語音声学会

後援：プリティッシュ・カウンシル

### 談話会開催

1999年12月11日(土)14:00-15:30  
場所: 椋山女学園大学  
発表者: Phillip Morrow 氏(名古屋学院大学)  
World Englishes 研究会  
発表テーマ: "World Englishes and the Teaching of English in Japan"

### 役員会開催

1. 1999年10月9日(土)

於: 名古屋女子大学

協議事項:

- 1 講演会開催について
- 2 ニュースレター第4号の編集と発行
- 3 今年度の活動予定
- 4 次回役員会

その他 会計監査について

報告事項:

- 1 全国大会定例理事会報告
  - 2 今年度支部大会について
- その他

2. 1999年12月11日(土)

於: 椋山女学園大学

協議事項:

- 1 平成12年度支部大会について
- 2 ニュースレター第4号の編集と発行
- 3 今年度の活動予定
- 4 次回役員会

その他

報告事項:

- 1 各支部研究会などの案内
- その他  
(倉橋洋子・東海学園大)

## <関西支部>

1. 1999年度第3回研究企画委員会

日時: 1999年10月16日(土)12:00-13:00

場所: 関西学院大学

議題

(1) 2000年春季大会のプログラムについて、テーマ、内容について検討。これまでの大学英語教育を顧み、今後を展望する方向でシンポジウムを組む。

(2) ワークショップの今後のあり方について、研究グループも含め広く募集する方向で検討。以上が主な内容。

2. 1999年度関西支部秋季大会

日時: 1999年10月16日(土)13:30-15:30

場所: 関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスA号

館

プログラム

(1) 開会の辞

豊田昌倫(関西支部長、京都大)

会場挨拶 中西正雄(関学大副学長)

(2) ワークショップ

「英文読解と語彙情報(mental lexicon)の活用」

・「語の意味へのアクセスにおける音韻の役割」  
門田修平(関学大)

・「語の音韻処理と英文読解の関係」

野呂忠司(相愛大)

・「読解における未知語の処理」

弥永啓子(相愛女子短大非常勤)

(3) 研究発表

・「英語の動詞と周辺の構文—感情的意味合いが動機づけるもの—」

住吉誠(神戸市外大大学院)

・「人称代名詞 they に関する一考察」

西岡武彦(神戸市外大大学院)

・「音楽表現の可能性

—音の共感覚表現について—

小森道彦(大阪樟蔭女子大)

・「大学生の語彙レベル:

語彙力調査の結果から」

岡田妙(同志社大) 石原堅司(同志社大)

松井進平(同志社大)

・「日本人 EFL 学習者の動機付け

—学習環境による動機付けの差異—

木村裕三(鳴門教育大) 中田賀之(姫路日ノ

本短大) 奥村智美(東大津高校)

・「立命館大学経済・経営学部における CAELL 導入とその成果」

野沢和典(立命館大)

(4) 講演

"Achievement and Proficiency Gain in University Language Programs: A Model for EAP Curriculum Revitalization" Prof. Steven Ross(関学大)

(5) 閉会の辞 多田稔(大谷大)

(6) 懇親会 関西学院大の、真新しい関西学院会館で行われ、和やかな歓談のひとつを過ごした。

3. JACET 関西支部講演会

共催: 英語音声学会、

プリティッシュ・カウンスル

後援: 丸善(株)、

ピアソン・エデュケーション(株)

日時: 1999年11月9日(火)18:00-19:30

場所: 芝蘭会館

テーマ: 'RP-a model for teaching'

講師：John C Wells 教授(Prof. of Phonetics, University College London) (参加者によれば、ユーモアを交えて多くの例が出され、英米の発音の違いや、豊富なデータをもとにして発音の変化についても報告され、無味乾燥という印象を持っていた音声学が、そうではなく面白いものとわかった。2000年に計画されているワークショップにも参加したい、とのことであった。) 参加者多数。

#### 4. 1999年度第2回談話会

日時：1999年12月4日(土) 15:30-17:30

場所：京都大学文学部地下大会議室

・講師：竹内理関西大学助教授

演題：「外国語学習方略の研究：その現状と方向性」

・講師：須藤淳神戸大学名誉教授

演題："My Linguistic Pilgrimage"

#### 5. 1999年度第2回運営委員会

日時：1999年12月4日(土) 13:00-15:00

場所：京都大学文学部地下大会議室

報告事項

(1) 全国定例理事会について

1999年度特別補助費申請採否及び交付額、JACET 学術賞、新人賞、実践賞、紀要について、AILA について、及び、「印税等に関する検討結果合意」の[覚書]についての説明を中心に報告がなされた。

(2) 1999年度秋季大会について

研究企画委員会運営準備による初めての大会。ワークショップの他、研究発表は英語学、英語教育学に分かれて行われた。出席者 106 名と盛況。なお、関西学院大より、10万6千円の寄付を頂いた。

(3) 研究企画委員会について

2000年度春季大会は、6月10日(土) 仏教大に於いて開催。テーマは「21世紀の大学英語教育を考える」。シンポジウムのテーマは「21世紀の大学英語教育を考える一回顧と展望」。

(4) AILA について

AILA 財務委員会よりの、AILA 大会のための個人負担経費についての「お願い」について報告。

(5) JACET Kyoto Seminar について

1999年8月9/10日に国立京都国際会館で開催されたが、参加者100名を越え、予想以上の盛況。アンケートによれば、会場環境、内容ともに好評。

(6) J.C. Wells 先生の講演会について

JACET 名誉会員である Wells 先生の来日を機に11月9日(火)に芝蘭会館に於いて開催された講演会についての報告(上記3参照)。

(7) その他

今後の予定(講演会、京都セミナー等)について報告。

議題

(1) 2000年度秋季大会について  
金蘭短大に於いて開催予定。

(2) 2001年度春季大会について  
神戸地区に於いて開催予定。

(3) 本部よりの印税について

著作権は基本的に編著者に属すること、及び、「印税等に関する検討結果合意」の[覚書]は、希望する者は[覚書]を選択してよいということ(98年決定)を再確認。

(4) 評議員のあり方について

評議員は大学を代表して学会の運営にあたることを確認。

(5) 運営委員会のあり方について

研究企画委員会委員が運営委員会に参加する必要性の有無について自由討議。

(6) 支部大会のあり方について

年2回開催の必要性について自由討議。

(JACET 通信7月号追加報告)

JACET 英語教育セミナー

主催：JACET 関西支部

共催：British Council, 現代英語談話会、Poetics and Linguistics Association, Japan

日時：1999年4月17日(土) 13:30-17:00

場所：芝蘭会館

講演：'Why "standard English" will no longer do'

招聘講師：Dr. Tony Bex

(PALA 会長、Univ. of Kent)

パネルディスカッション：Models of English for ELT in Japan

パネリスト：Tony Bex, 比嘉正範(龍谷大)、Helen Todd(British Council, Kyoto), 斎藤兆史(東大)

(参加者によれば、Socio-linguistic 的に言語が捉えられ、様々な考え方が提案され、それに対して活発な質疑応答があった。)

(四天王寺国際仏教大・三好康子)

## <中国・四国支部>

1. 新役員 (1999年10月1日から)

新支部長：増田豊(松山大)

新書記：瀧由紀子(松山大)

新役員：鳥越秀知(詫間電波高専)

2. 2000年3月までの予定

## 宿泊研修会

日時： 1月29日(15:00-)・30日  
場所： 高知工科大学および「夢の温泉」  
研修会テーマ：新学習指導要領と大学英語入試

## 支部役員会

日時： 3月4日(土)  
場所： 松山大学  
議題： 99年度事業報告、2000年度事業計画、  
会計報告、予算案など  
(池野修・愛媛大)

## <九州・沖縄支部>

### 1 運営委員会

日時：1999年9月11日(土) 14:00-16:30  
場所：西南学院大学 学術研究所第2会議室  
議題：

1. 1999年度支部研究大会について
2. 2000年全国大会について
3. 支部紀要について

報告：全国理事会について

日時：1999年10月23日(土) 15:30-16:30  
場所：西南学院大学 学術研究所第2会議室  
議題：

1. 1999年度支部研究大会について
2. 2000年全国大会について
3. 支部紀要について

日時：1999年11月26日(金) 16:30-18:30  
場所：ホテル サンライト  
議題：

1. 1999年度支部研究大会総会議事運営
2. 2000年全国大会について

### 2 秋季学術講演会

日時/会場：11月20日(土) 15:30-17:00  
西南学院大学  
講師：G.N. Leech  
演題：How the Grammar of English is Changing

### 3 第15回大学英語教育学会九州沖縄支部大会

日時：11月27日(土) 9:30-17:30  
会場：運輸省航空大学校  
研究発表(発表者名のみ\*順不同)  
BOOKS, Marilyn / SNYDERS, Steven M. /  
KANAMORI, Tsuyoshi / SOMEYA, Masakazu /  
TANIGUCHI, Masaki / RUXTON, Ian / WARRIES,  
Garth A. / GALLIAN, Judith M. / Nicoll, Hugh / 小  
田まりこ; 小田誠雄; 山内ひさこ; UNDERWOOD,  
William / 安浪誠祐 / FOUUSER, Robert J. /

FURUKAWA, Tomoko / 川上典子 / MORK, Trine  
/ 樋口晶彦 / 岩田京子 / 光永武志 / NARIKIYO,  
Hiroko / NONAKA, Seiji / 霜鳥智鶴 / 福屋利信 /  
GUEST, Michael / 原口治 / 井上奈良彦 / 竹内千  
春 / KAO, Rong-Rong / SHIOTSU, Toshihiko /  
STEWART, Jan E. J. / 山浦雄二 YOSHINAGA,  
Hideyuki. (武井俊詳・西南学院大)

## 研究会活動報告

## <北海道>

### CALL

1999年前半は8月に開催される AILA99 のポ  
スターセッション発表(日本人大学生による e-  
mail コーパスの分析)準備が活動の中心とな  
った。4月から7月末までに7回の研究会がも  
たれ、主に e-mail コーパスデータの精査、分析、  
語彙リストの作成、分析ソフト kensaku の改良  
に費やされた。研究会の前後はメールによる意  
見交換、データ送信が活発に行われた。6月  
には北海道支部大会で中間報告を行った。AILA99  
での発表は8月2日に行われ、他の会員より貴  
重な意見を頂戴した。AILA 以後は研究成果を論  
文にまとめるための作業に入り、9月から12月  
までに3回の研究会を開いた。来年度は、E-mail  
コーパス分析のために使用した JACET 基本単語  
4000 を、我々のコーパスから抽出した語彙リス  
トと比較検討したいと考えている。

(上野之江・北海学園大)

### CCR

#### (Classroom-Centered Research)

今年度は主として7名のメンバーで活動を続  
けている。前年度に行った Bachman(1990) の  
Test Method Facets の観点からのリスニング・テ  
スト分析に続き、今年度は北海道内12大学のリス  
ニング試験を対象にコミュニケーション能力  
の観点から評価を行うシステムを作成した。こ  
の分析に関しては、月1~2回の例会を行い、  
JACET 北海道支部大会において「道内98年度  
のリスニング試験分析—CLAの観点から」と題  
して研究発表を行った。また、客観的なシステ  
ム構築に関しては、共同研究論文『リスニング・  
テスト分析モデルの開発—コミュニケーション  
能力の視点から』にまとめ、北海道大学言語文  
化部紀要第38号(2000年3月発行予定)に発  
表している。現在は分析結果をまとめた英語論

文 The Assessment of Listening Comprehension Tests from the Perspective of the CLA Model を作成中である。CCR は英語の授業に直結する研究領域であるので、各レベルの英語教育に応用できるものである。ご関心ある方々の参加を期待している。(西堀ゆり・北海道大)

## 談話分析

英語教育の新しい視点としての談話分析について、基本的考え方・言語観を含めた談話分析の知識・方法・課題を学ぶべく研究会を続けている。

この1年間は主として高等学校用のOCA教科書分析に取り組んできた。実際の日常生活の場面でのコミュニケーション能力養成を重視するOCA教科書について、談話分析の観点からその non-authentic features をいくつかの項目について検討し、より望ましいテキストのあり方や活用方法について考察した。その結果は AILA '99 で発表させていただき、聴衆より貴重なご意見を頂戴した。目下その教科書分析をさらに進め、隣接ペア、依頼表現の用いられ方について研究を深めているところである。この結果を 2000 年 3 月バンクーバーで開催される TESOL にて発表する予定である。TESOL 参加を計画されている方々にはセッションにお運び頂ければ幸いです。(早坂慶子・北星学園大)

## <本部>

### 教育問題

年の始めから、夏の大会を目指して、全員一致協力した活動を続け、大会では下記のようなポスターによる発表をすることが出来た。かなりの数の人々が訪れてくれて、用意した 100 部ばかりの冊子はすぐになくなった。この問題に対する関心の高さを示していると考える。

#### AIMS:

1. To clarify the present state of pre/in-service English Teacher training in Japan
2. To explore the implications of the recent amendment of the Educational Personal Certification Law (July 28, 1997), and the Curriculum Council's Report (July 29th, 1998)
3. To survey the experimental English 'teaching' at elementary schools

#### METHODS:

1. By analyzing and studying the questionnaires sent to local boards of education and elementary schools throughout Japan

- 1) By studying the related literature

#### Contents:

1. Pre-service university training
2. English teacher screening and hiring
3. In-service training for novice and experienced teachers
4. English education in Japanese elementary schools

これは極めて字数の限られた発表だったので、今後はすべての資料を生かし、我々で費用を負担してまとめあげる目標をたてている。(浅羽亮一・明海大)

## 文学

1999 年度も、基本的な活動として、研究例会をほぼ 1 カ月に 1 回のペースで開きました。その例会で準備を進めて、8 月の AILA '99 Tokyo では、'The Use of Literary Texts in Japan's EFL Classrooms' をポスター発表しました。

また、1995 年度以来進めていた出版プロジェクトが、本研究会編『<英語教育のための文学>案内事典』(彩流社)としてようやく完成、2000 年 1 月 31 日付で刊行されます。文学を取り入れた英語教育を考え、実践するとき参考になる各種の本や文献のうちの代表的なものを 60 点ほど取り上げて、それぞれの「批評的紹介」をしたガイドブックです。ご利用下されば、またご勤務校の図書館などに購入を働きかけて下されば、幸いです。

こうして活動に一区切りついたので、2000 年 2 月以降の研究例会では、とりあえず何回か、Mick Short, Exploring the Language of Poems, Plays, and Prose (Longman, 1990) を輪読することを柱にしなが、次の具体的なプロジェクトを模索することになっています。新しく参加して下さるにはいい機会です。意欲ある方のご連絡をお待ちしています。

(田中英史・大妻女子大)

## バイリンガリズム

バイリンガリズム研究会では、1999 年の前半には、8 月の AILA での発表を目標に活動を行いました。日本における、諸外国語教育の形態を探り、その実像と特質を明らかにすることを目的として、まず、種々の外国語教育を実践している学校を対象にアンケートを実施しました。アンケートは、家庭や学校での使用言語、カリキュラムの内容、到達目標、父母の期待度などを問う、広い範囲の質問事項により構成されています。得られた解答を慎重に分析した結果、

日本の外国語教育のプログラムは、おおまかに9つの類型（早期教育型、イマージョン型など）に分類できるのではないかと、という提案をポスターセッションの形式で発表しました。

今年の後半は、特にバイリンガルの児童（生徒）の言語能力の測定というテーマで研究を行ってきました。一緒に *The Development of Second Language Proficiency* (1990) を読みながら、児童の言語能力の発達とその測定方法について、検討を行っているところです。2月には、トロント大学の中島和子先生の講演会を企画しており、さらに討論を深めていく予定です。（岡秀夫・東京大、文責：河野）

## 異文化学習

当研究会では、98年のJACET大会での「第2言語によるライティングについて Ulla Connor の *Contrastive Rhetoric* に学ぶ」の研究発表の具体的展開として8月のAILA大会でメンバーの西村厚子会員と私が「対照修辞学—英語に翻訳された日本の書籍の事例」の共同発表を行った。

これは、具体的な翻訳事例（日本の経済書の英訳本）をもとに、修辞構造における文化の相違が、一見無関係と思われる学術書（この場合は経済書）をあえて選び、一言語から他の言語に翻訳される際に、どのように表現が変化するか、言語（特に修辞）での違いが翻訳の過程、また、翻訳作品に、どう影響を与えるのか、更に、当初の日本語版と英語版を学生に対照学習させることによる教育的示唆を学生のアンケートをもとに纏めてみた。結果として、学生は、二つの言語による差異を理解し、その学習が役にたったことを認めている。その後、当該内容を更に纏め、論文発表をしようと研究をすすめている。

（加藤忠明・江戸川女子短大）

## ESP

1996年度に発足されたESP研究会はまずその3年間の集大成として『*Bi-Annual Report*』を1999年3月に刊行した。3年間の軌跡と21世紀に向けてのESPの方向性を探る意味でも研究会としては大きなものであった。

AILA世界大会では本研究会主催のイベントとして、柴山委員と飯野委員が「英語教師はESPを教えることができるか」といテーマでもポスターでの発表を行った。また、古谷委員、オーア委員、野口委員、ローレンス委員が「21世紀におけるESP：新しい流れと新なる挑戦」というテーマのESPのシンポジウムに参加して活発

な議論を交わした。もちろん、その他各委員がそれぞれ口頭でポスターでESPに関しての研究を発表したことはいうまでもない。

年間を通じた活動としては1999年5月22日に渡辺委員が「ESP総論：ジャンル分析とESPの発展」、6月26日に岩淵委員が「コンピュータを利用したESP教育」、10月23日に山崎委員が「ESPにおける統計を使った分野研究の役割」、11月27日に寺内が「ESP発展の歴史」をそれぞれ発表した。年明けの1月22日には竹蓋委員が「日本人上級レベル学習者を対象とした英語教授のために開発したコースウェアシステム」を、さらに3月24日と25日には「ESP入門書の各章論評」を担当委員が発表する予定である。

2000年度の主目標として『ESP基本書』の発行がある。日本でESP教育を浸透させるためにもこの本は是非完成させなければならない。よってESP研究会の主活動を刊行に向けての勉強会に置く。さらに沖縄での全国大会では、ESPに興味を持っている大学教員に対してワークショップを開催する予定である。

（寺内一・高千穂大）

## クリティカル・シンキング

(Critical Thinking Across the Curriculum)

当研究会では、昨年度に引き続き「教育カリキュラム全般に渡るクリティカル・シンキングの役割と可能性」というテーマで活動を行ってまいりました。メンバーは現在14名と少数ですが、今後は英語教育やメディア・リテラシーとクリティカル・シンキングの関係も研究対象に含めていきたいと考えております。平成11年度は、3月20日の「東海大学コミュニケーション教育フォーラム'99、日米交歓ディベート」の協賛と、8月5・6日のAILA'99におけるクリティカル・シンキングのシンポジウム2つ("Critical Thinking: Interpretations and Pedagogical Imperatives" & "Critical Thinking in the Japanese Classroom")を主催いたしました。12月17日には、新に研究会のメンバーになった先生方を迎えて、クリティカル・シンキングの定義と研究領域に関する会合を行いました。

今後は、昨年以上に対外的なイベントを強化していこうと考えております。尚、昨年までの代表者ウィリアム・オコーナー（亜細亜大学）が1年間の海外研究に出た関係で、今年は代表者を鈴木健（津田塾大学）がとめさせていただきます。よろしく願いいたします。

（鈴木 健：津田塾大学）



## 中間言語分析

当研究会は、「外国語学習（とりわけ日本人の英語習得）における障害要因に光をあて、指導上の具体的な指針を引き出すための中間言語分析法の実践と、普及」を目的として平成 11 年 4 月に発足した。

第 1 回研究会では、メンバーの紹介、年間活動計画や、今後の方針などを確認すると共に、会員各自の研究内容や研究課題を設定した。

昨年 12 月の JACET 月例会では、日本語で研究発表を行い、今年 5 月の JACET 月例会では、英語による研究発表を行った。

8 月に開催された AILA 東京大会では、火曜日（日本語）と金曜日（英語）の二日にわたってシンポジウムを行い、日本語の統語分析、英語の音声分析、談話分析、読解ストラテジー等に関するメンバーの実践例の紹介、討議を行った。また、昨年度の活動目標であった「中間言語分析：英語冠詞習得の軌跡」（開拓社）の出版は、本年 2 月頃になる予定。当研究会は、メンバーが関心のある研究対象項目について研究テーマを各自で設定し、研究の目的、方法、今後の展望・課題など中間言語分析を実践する上での総ての問題を、お互いにじっくり討議し合ったり、会員各自の研究成果の発表および、問題点を提示していただく場です。

今後は、会員各自の研究を積み重ねて、JACET 全国大会などでワークショップを企画したり、著書を共同編集して出版するよう取り組んでいます。より多くの新会員のご参加を歓迎いたします。（水野光晴・神奈川大）

## <中部支部>

### 誤文

ライティング指導法の原理は多いが、ネイティブスピーカーに対するコミュニカビリティという観点から、学習者が書く英文を評価し指導する方法を追求してきた。97 年度に中部支部大会でワークショップ、98 年度全国大会でのシンポジウムを経て、今年度 AILA 世界大会で 2 時間のシンポジウム "Communicability" and Its Relevance in EFL Writing Classes を行った。この大会で成果を問うことを目標としてきたので、今年度 4 月以後大会まではその準備の仕上げ、大会終了後はそこで明らかになった問題点解決の論議や、その後気付いた改善項目の検討を続けている。分析の精密化、出された数値の意味

の再検討、教育効果への配慮など多岐にわたる。

メンバーは 10 人、シンポジウムでは、うち 4 人が発表者となったが、毎月の集まりでは全員から活発な意見が出されている。

幸い、この研究会が計画する研究報告集の刊行に、必要な経費の一部を JACET より特別補助費として援助していただけることになっているので、このところはその分担執筆の打ち合わせも進めている。息の合った会で、成果への期待は大きい。（丹下省吾・名古屋外国語大）

### 待遇表現

私どもの研究会は、例年、全国大会、中部支部大会、中部支部談話会で、ワークショップや個人発表をしてきましたが、今年度は国際応用言語学会（AILA）でシンポジウムを持つことをめざして、すべての力をそこに注いでまいりました。この大会は日本人以外の参加者が多いことを考慮に入れ、発表を英語で行ったのは当然ですが、内容も日本および日本語をより深く知ってもらうことを目的として、調査・分析の対象を日本語に絞りました。

シンポジウムのタイトルは 'Positive politeness trend in recent Japanese' で、若者の使う「新」日本語使用法の中に、英語話者が根底に持っているといわれる 'positive politeness' の感覚が見え隠れしているのではないかと、ということ、発表者が各自の調査結果に基づいて提案しました。

発表当日にはかなり大きい教室がいっぱいになるほどの出席者があり、質問・コメントの時間もたっぷりとったため、活発な質疑と討論ができました。多くの方から、研究の継続を希望する旨のご発言をいただき、研究員一同いたく感激しました。来年度以降も英語と日本語における待遇表現の比較を通して、実際の教育に寄与する研究を進めたいと思っております。

（堀素子・東海女子大）

### ESP

中部支部 ESP 研究会では、発会当初は英語嫌いな学生に、英語を学習させるにはどうしたらいいのかを考えていました。バブル期の付けがまわり、学生たちの学習意欲にも曖昧さが残っていたのだと思います。しかし不況のおかげ（？）で学生の学習意欲にも火が付いたのではないのでしょうか。特に私たちが掲げてきた ESP 教育に関しては、教育効果が現れてきていると断言できる段階にきています。

発会以来、特に、工業系学生を対象にして調査を行ってきました。工業系学生は専門に關

しての明確な学習目的を所持しています。工業英語教育を行なうことで、学生の更なる英語学習意欲の増加が期待できると考えています。

工業が日本にとっての基盤産業であり、現在そして未来に向けて、多くの他の分野との結合を果たしていくことは確実です。また 1999 年 3 月に発表された新学習指導要領でも工業英語の位置付けが上位にランクされたこと、また 4 月には技術者資格に関してのカリキュラムの提案がなされたことを含め、1999 年は ESP にとって重大な意味をもつ、実り多い年でした。2000 年以降の ESP 教育は他分野との「混合」ではなく「化合」を目指すことになると予測されます。(馬場景子・中部大/滝川桂子・名古屋文理短大)

## <九州沖縄>

### ESP

「研究会活動報告」九州沖縄支部 ESP 研究会 1999 年度の活動は以下の通りである。まず、ここ数年来積み重ねてきた ESP 研究の成果を AILA'99 世界大会において発表した。シンポジウム企画では、山内ひさ子(久留米工業大)が 'Making ESP a Mainstream Component of College English Education in Japan' と題して、21 世紀の日本の大学において ESP を英語カリキュラムの主要な柱として据えることにより、今日の大学英語教育の停滞状態を打破する方策を提示した。並びに John Kimball (宮崎医科大) は、談話の分析結果をもとに最近の学術分野における実践コンテキスト重視の教育方法論に焦点を当てた検討を行った。口頭発表では、横山彰三(運輸省航空大学校)が航空管制で使用される英語(RT)について、使用される語彙の分析とその知識を背景とした場合の学習効果や、ディスコースレベルにおける RT の特性について検討を加えた。ESP 関連の発表はどれも参加者が多く、会場からの質疑は実に有益であった。他支部の ESP 研究会との意見交換ができたことも大きな収穫であった。また '99 年 11 月 27 日には航空大学校において JACET 九州沖縄支部大会が開催され、川北直子(宮崎看護大)が「看護のための語学教育」と題して「看護英語」の位置づけ、看護大学生の英語能力、それを支える英語教師の役割について発表した。その他個人の論文等は割愛するが、現在メンバーもふえて九州沖縄における ESP の活動もすこしづつ根を下ろしてきたように思う。さらにいろいろな分野からの参加者を是非お待ちしております。

(横山彰三・運輸省航空大)

## 東アジア英語教育

この研究会は昨年度「教材研究会」と「学習実体調査研究会」が合併して誕生した。「学習実体調査研究会」の前身は「JACET 九州・沖縄支部研究プロジェクト委員会」は 1992 年度に発足して以来、長年の研究を「このままでよいのか大学英語教育」(松柏社、1997)を刊行して 1997 年 JACET 学術賞に輝いた。

本研究会の活動内容は次の通りです。

(研究会場) 主として西南学院大学学術研究所の会議室を利用している。

(開催日時) 毎月の第 2 土曜日の午後 3 時-5 時まで。研究発表は 90 分。質疑応答は 30 分。

(研究内容) 東アジア諸国の、1) 中・高・大学の英語教育目的、2) 教科書及び教材、3) シラバス、4) 高校・大学入試及び試験問題、5) 英語教員養成等。

(研究方法) 上記の内容から各人が研究課題を設定して個人及びグループによる研究をして発表。

(会員数) 21 名(大学・短大教員 15 名。高校教員 6 名。)

(ホームページ)

<http://kumagaku.ac.jp/teacher/~fouser/AsianEng.html>

(連絡先) 清水克己

tel:(0948)22-0370 fax:(0948)23-7509

email:kiyonaga@bronze.con.ne.jp

(木下正義・福岡国際大)

## 英語とコンピューター

前半の活動は、AILA'99 を中心とするものであった。本研究会メンバーを主力とする 3 つのグループによる研究成果を、シンポジウム・論文発表・ポスター発表として世界から集まった研究者たちと共有した。

鈴木(純心女子短大)のグループの電子メールを活用した英語コミュニケーションについての研究、濱田(純心女子短大)のグループの機械翻訳ソフトの英語教育現場での活用研究は、AILA 以後も活発におこなわれており、その成果は電子工学系と外国語教育系の専門家による研究会(1月15日 於:福岡大学)で発表される予定である。

なお、上村(長崎シーボルト大)のグループの研究成果の一部は、

<http://homepages.msn.com/LibraryLawn/profuemura>

で参照可能。

(上村俊彦・県立長崎シーボルト大)

-- 参考 -----

(参考までに JACET 研究会にかかわる規定を掲載しておきます。ご確認下さい。)

## JACET 研究会規定

(目的)

第 1 条 大学英語教育学会会則第 12 条により研究会を設置する。

(名称)

第 2 条 研究会の名称は〈 研究会〉とする。

(構成)

第 3 条 研究会は 5 名以上の JACET 会員で構成する。

2. 研究会には代表者と副代表者をおく。代表者と副代表者は学会の役員(理事、評議員、研究企画員)があたるのが望ましい。

3. 研究会に所属する者は、原則として研究会に参加できなければならない。但し、e-mail 等を使つての参加も認められる。

(任務と連絡)

第 4 条 研究会は研究成果を全国大会や支部大会、紀要等で発表することを原則とする。

2. 研究会は原則として月 1 回開くものとする。

3. 研究会は原則として年 1 回、活動報告及び会計報告を本部に行う。

4. 研究会の場所は各研究会が決める。

5. 研究会は、2 年単位で活動を行い、この期間を経過した場合には、そのつど更新する。

(研究補助費と特別補助費)

第 5 条 研究会には、通信費等として一定限度の研究補助費が与えられる。

2. 研究会には、研究成果によって、20 万円を限度に特別補助費が与えられる。

(研究成果の発表)

第 6 条 研究成果の出版物刊行については、本部と支部との合意に基づく覚書方式による。

(研究会担当委員会)

第 7 条 本部に研究会担当委員会を置き、別記〈JACET 研究会担当委員会規定〉に定める任務を担当する。

## 研究会担当委員会規定

(構成)

第 1 条 研究会担当委員会は、担当理事、正副委員長、本部委員(若干名)、支部委員(各支部選

出委員 1 名、各支部幹事)、代表幹事をもって構成する。

(任期)

第 2 条 任期は 1 年とする。但し、重任を妨げない。

(任務)

第 3 条 各支部事務局及び研究会代表者への諸連絡や意見の集約を行う。

2. 各研究会からの活動報告の集約と、理事会への報告を行う。

3. 研究会補助費の申請と集約、ならびに、理事会の諮問に応じて原案を提出する。

4. 研究領域・分野の重複や過不足の把握と、学会全体で調整の必要がある場合には調整案を作成し、理事会に提出する。

5. 全国大会、紀要等における研究成果の発表及び研究成果出版物の発行を促進する。

6. 日常の業務は本部委員会及び支部事務局が行う。

(委員会の開催)

第 4 条 本部委員会は、原則として 2 か月に 1 度の割合で開く。議長は委員長、書記は副委員長が当たる。

(全国研究会担当委員会)

第 5 条 全国大会時に全国研究会担当委員会を開催する。

## JACET 研究会内規

(設置申請)

第 1 条 研究会の設置申請は、「JACET 研究会規定」に則っていれば、随時受け付けられる。但し、学会の会計による予算作成の時期を勘案して、1 月 31 日迄に申請される研究会に限り、翌年度の研究補助費(以下補助費とする)配分の対象となる。また、新研究会の認定は 4 月 1 日付けで行われることを原則とする。

(報告義務)

第 2 条 研究会は最低年 1 回の活動報告及び決算報告の義務を負うが、特別の理由なく 2 年間この義務を怠った場合は、JACET 研究会の認定を取り消すことがある。

(研究補助費)

第 3 条 補助費の用途は主として通信費、コピー代等であるが、補助費を上回る支出があった場合は、各研究会の自助努力でまかなうものとする。

2. 年度末に補助費が余った場合は、その残額を翌年度回しにする。但し、翌年度に支給され

る補助費は、規定額より上記の残額を差し引いた額とする。

(特別補助費)

第4条 特別補助費の申請は1研究会1件を原則とする。また、1件の上限を20万円とする。

2. 特別補助費の申請締切は2月末日とする。

3. 特別補助費の対象は研究成果の出版物刊行、講演会・シンポジウム等の開催、特別文献購入等であるが、原則として次の条件を満たすものに限る。

(a) 出版刊行物については、本規定第6条による。

(b) 講演会・シンポジウム等の開催に際して、会員を講師・パネリストとして招く場合は謝礼は出ない。交通費補助は2万円を上限とする。会員以外の講師・パネリストを招く場合は、その謝礼及び交通費は、国内からの招致は、各2万円、計4万円を上限とし、また国外からの招致は、各3万円、計6万円を上限とする。

(c) 特別文献購入については、研究者として常識的に所有すべきものは除外される。購入が認められた文献は原則として学会の所属となる。

(以上、2000年1月現在)

## JACET月例研究会

<5月>

### Interlanguage Analysis of Strategy Development in Reading English

Akiko Kochiyama

This presentation describes a research study on the strategy development in reading English. This study is based on the well-known theory that readers read more effectively in a foreign language when they are aware of and consciously use reading strategies.

The subjects of the study were Japanese University students who were learning English. First they took proficiency tests to be divided into each levels. Then they took experimental tests of reading

comprehension and questionnaire about their conscious use of reading strategies.

Reading strategies mainly consist of attempts to grasp the gist of a text and to guess unknown words and factors. For this research guessing strategies were divided into five groups; that is reading strategies which depend on (1) lexical knowledge, (2) grammatical knowledge, (3) context, (4) previous knowledge and (5) given clues. The data suggests which strategy is most active in each level of proficiency.

<10月>

「ライティングのフィードバックはどうあるべきか—教師と学生の立場から」

八王子ライティング研究会  
熊本たま(東京大)、松本佳穂子(東京外国語大)、  
上村妙子(専修大)、大井恭子(東洋英和女学院大)

大学のライティング指導において、指導効果をあげようと模索する教師の間で、最近関心を集めているものとして、発想や構造や論理の流れなどの content 面と、正確な文を書くために必要な form 面のどちらを中心に据え、どれくらいの比重でフィードバックを与えていくべきかと言う問題がある。今回の発表では、まずこの点に関する先行研究のサマリーとして、フィードバックに関する ESL, EFL, そのほか外国語教育の分野でのこれまでの研究を総観した。

次に、教師と学生がそれぞれフィードバックに関し、どのようなことを期待しているのかを探るために行われたアンケートの結果を発表した。このアンケートには、content と form 面に関する問題意識が反映されており、教師用と学生用が対になるように作成してある。質問項目では、望ましいフィードバックについて、その形式や焦点やエラーを直す頻度とその方法などを尋ねた。被験者は、大学生 46 人とライティング指導をしている大学の教師 50 人(うち半数がネイティブ)である。その得られたデータを、1) 学生の傾向、2) 教師の傾向、3) 学生の傾向対教師の傾向、4) ネイティブの英語教師の傾向、5) 日本人の英語教師の傾向、そして、6) ネイティブの英語教師の傾向対日本人の英語教師の傾向、という観点からアンケート結果を分

析した。

まず、学生と教師の間に見られた類似点及び相違点について述べてみると、「フィードバックの理解度」に関しては、学生側の方が、教師の与えるコメントに対する自らの理解度を高く見なす傾向にあった。「ライティング指導の評価」に関しては学生の方が教師が思うよりライティングを楽しんでおり、また、教師も学生も現在のライティング指導が将来も役立つと考え、更に両者とも *rewriting* を重視する傾向にあった。

「初稿に対するフィードバック」のあり方としては、学生も教師も *idea* を重視する点では一致していたが、教師が学生より *organization* を重視したのに対し、学生はその他の項目 (*vocabulary, grammar, mechanics*) をより重視する傾向にあり、特に学生の *grammar* に対する関心度は教員を大きく上回った。「最終稿に対するフィードバック」、「伸びにつながると思うフィードバック」の焦点のあり方に関しても、基本的に同様の傾向が見られ教師側に比べて学生側は大幅に *grammar* 重視の傾向にあった。「文法的正確さ」については両者とも比較的高い意識を示した。

「エラーを指摘する程度」に対しては両者とも *important errors* を最優先していたが、学生が教師より *all errors* を指摘してほしいと希望したのに対し、教師は学生より *most major errors* を重視する傾向にあった。「ペンの色」についてはどちらも赤ペンを好んでいた。「エラーの訂正の仕方」については学生も教師も「場所を示して手がかりを与える」方法を好み、「すべてを正しく直す」がそれに続いた。学生・教師の比較において最も特筆すべき点は、フィードバックの焦点のあり方として教師側が、*idea, organization* といった *content* 項目を一貫して重視していたのに対し、学生側は *grammar* を中心とした *form* に関する項目を重視する傾向にあった点である。

次に、日本人教師とネイティブの教師の傾向の比較をしたが、予想に反して類似点の方が相違点より多く、教師集団のライティング指導に関する態度はかなり均一であった。よって、上記の教師対学生の差はより意味をもつと言える。特筆すべき相違点としては、まず、ネイティブは、初稿、最終稿に対する、そして「伸びにつながると思う」フィードバックの焦点について一貫して *content* 項目 (*idea, organization*) を *vocabulary* と *form* 項目 (*grammar, mechanics*) より重視していたが、日本人は、一般的傾向はほぼ同じではあるが、最終稿で *mechanics* をより重視、「伸びにつながると思う」焦点としては *idea* をやや軽視、*grammar, mechanics* をより重視し

ていた。またネイティブは初稿でのフィードバックを、日本人は最終稿でのそれをより重視している様子が伺えた。「エラーを指摘する程度」については、日本人は半数が *important errors* を、ネイティブは *important errors* と *most major errors* をそれぞれ 1/3 が選び、残りの日本人はより *all errors* を、ネイティブはより *errors that prevent communication* を選んだので、そこにはネイティブのコミュニケーション面への注目が見られた。「ペンの色」については、日本人のちがはるかに赤ペンを好み、「エラーの訂正の仕方」については、ネイティブの方がやや「正しく直す」人数が多かった。

以上の分析の結果、学生側は *content* と *form* 面の両方にわたるフィードバックを望み、教師側は日本人もネイティブも *content* 志向で、ここに両者の相違が認められた。それでは、教師の与えるフィードバックはどうあるべきだろうか。今回の被験者と同じ学生を対象に、*form* 中心のフィードバックと *content* 中心のフィードバックを与えその効果をみた別の実験 ('99 年の AILA にて発表) の結果によると、*content* と *form* の両方を望んだ学生の中でも、*content* 中心のフィードバックを受けた学生の作文は、*form* 中心のフィードバックを受けた学生の作文に比べ、明らかな質的向上を示していた。この結果は *content feedback* が概ね有効であることを示唆するものと思われるが、本研究で見られたような学生の志向は動機づけに影響を与えることも考えられるので、英語力の差などその他の要素との関わりも含めて更に深い考察、研究が必要と思われる。

## <11月>

「大学入試ライティング問題の分析：パラグラフ・ライティングに焦点をあてて」

塩川春彦・北海学園大

長年、大学入試問題について調査・研究されている塩川先生は、次のような発表をされた。これまでの英作文教育では、和文英訳が主たる教授方法であったが、現在の文部省高等学校指導要領は、学習者が自分の考えをまとめた量の英語で表現できるように指導するように求めている。これに伴い国公立大学の入試英語問題にも変化が表れ、パラグラフやエッセイを書かせる問題が過去 5 年間に激増している。「意見と理由を書く」「原因と理由を書く」「具体例

を挙げる」などの、レトリックの知識を大学入試で求められていることも、分析によりはつきりとわかる。大学入試問題はしばしば英語授業の革新を阻む要因として挙げられてきたが、ライティング問題における変化は、コミュニケーション型な英語指導を推進していく立場から歓迎すべきことである。しかし、高校現場でのライティング指導は、まだ和文英訳が主流となっていることも、高校英語教員へのインタビューにより判明した。大学入試の高校英語教育に与える影響を考えると、パラグラフやエッセイを書かせる問題が今後も引き続き出題されるべきであり、それにより、高校教員の意識が変わっていくであろうと思われる。

講演後の質疑応答の際には、大学教員のみならず、高校教員、予備校教員、現役大学生等、さまざまな立場の参加者から活発な意見が出され、内容の深いディスカッションができ、とてもよい研究会であった。

(岡田礼子・東海大短大)

## <11月>

### 「大学入試問題の分析」

JACET SIG：大学入試問題研究会

この研究報告は馬場千秋、浜岡美郎、伊部哲、川口邦子、清川英男、永田博人、奥津文夫、鈴木純子、田辺洋二による共同研究の一端を紹介したものである。読解問題については、JACET基本語(4000)以外の単語の百分率をJACET LIST SCORE (JLS) と称し、これを難しさのひとつの指標として比較的受験生の多い大学、学部を中心に3年間の問題(計80題)を分析した。その結果、毎年5学部以上がJLS 5%以上の問題を出題していることが分かった。

リスニングの問題に関しては、99年の国公立私立、98年の私立大学(計151題)について分析した。繰り返して読まれる回数、解答のしかたなどによる「リスニングの問題らしさ」の度合いを数値化してみた。

99年の文法、語法、表現問題については、問題数や難問は以前より減ってはいるが、かなり厳密な問題がまだ出題され、英米文化に深く根差した表現問題が散見される。世界語としての英語という観点への移行を考える時期に来ている。

すべての大学で、出題者同志の検討会を毎年もってもらいたいものである。

(清川英男・和洋女子大)

## 新刊書案内

JACET 文学研究会編

### 『<英語教育のための文学>案内辞典』

(彩流社、2000年1月31日刊)

A5版上製、350頁、本体価格3800円)

### <書評>

「文学を使って英語を教えたい……」と思ったときに参考になる内外の文献を批評的に紹介・解説する。20世紀英米の主要な批評理論書から、教師用参考書(リソースブックなど)、漱石からはじまる代表的な日本人研究者の著作、それに英米文学史、すぐに使える事典類、文学の背景知識を与える書物までを、ほぼこうした区分のもとに取り上げ、各分野での代表的文献を計58点、それぞれ独立した項目として立てている。各項目の中で言及される関連文献も多く、英語教師のための必読書案内になっている。

文学研究会はほぼ1カ月に1回のペースで研究例会を持っているのだが、そこで1995年度以来おこなってきた研究活動を基にしてできた本という。執筆者は、研究会会員の中から12名、他に依頼執筆者17名と、多数にのぼっている。後者の中にはJACET会員以外の著名な研究者も多い。

「まえがき」にも言うように、「望ましい言語教育とは、文学を十分に視野に入れ、踏まえたものであるべきだ」とすれば、英語教師もできるだけ豊かな文学的素養を身につけることが期待されよう。そうした方面での自己啓発をこそざす人々にとって、本書は格好のガイド役を果たすと思われる。大学ばかりでなく中学・高校の英語教師にも、またさらに広く、英語教育に関心のあるあらゆる人々にも、勧められる本である。

## 講演会・研究会案内

\*\*\*\*\*

### 講演会「早期英語教育の可能性」

3月18日(土) 10時-12時  
八王子市学園都市センター  
(JR八王子駅前)・イベントホール  
講師: Harley 博士 (トロント大)  
司会: 瀬谷 (杏林大)  
Harley 博士は、Age と SLA 研究の権威です。

### ワークショップ

- (1) 3月17日(金)  
「年齢と第二言語習得」
- (2) 3月22日(水)  
「公立小学校への英語教育導入」
- (3) 3月23日(木)  
「私立学校の試み」

いずれも 18 時-20 時に八王子市学園都市センター第三、第四セミナー室にて開催。(2)、(3)は実践校のスライド上映有り。  
参加費無料。

ワークショップ参加希望の方は、杏林大学大学院教務課 Tel.(0426)91-0011 Fax(0426)91-5854 まで、事前にご連絡下さい。

主催: 杏林大学大学院国際協力研究科  
杏林大学国際交流研究所  
後援: 国際交流基金

\*\*\*\*\*

### Michael Long 特別講演会

ハワイ大学のマイケル・ロング教授の連続講演会を以下の要領で開催いたします。お誘いあわせのうえ、御参加ください。

第1日 3月27日(月) 16:30-18:00  
タイトル: Age and SLA Theories  
主催:  
早稲田大学言語教育研究会・JACET SLA 研究会

費用: 1000 円 (早稲田大学関係者無料)

第2日 3月28日(火) 16:30-18:00  
タイトル: Current Trends in SLA Research  
主催: 早稲田大学言語教育研究会  
費用: 無料

会場: 早稲田大学 14 号館 502 教室

\*\*\*\*\*

### JACET 英語辞書研究会 3 月例会

#### 「シンポジウム: 和英辞典を考える」

日時: 3月29日(水) 2:30-5:15  
講師:  
中本恭平 (共立女子大学)  
「和英辞典の存在意義」  
小林ひろみ (文教大学)  
「和英辞典の編集, 特に用例の収集・作成・記述」  
中尾啓介 (帝京大学)  
「和英辞典編集上の問題点」  
司会: 村田年 (千葉大学)  
場所: 早稲田大学商学部 9 号館 5 階大会議室

問合せ先: 村田年  
email: minoru.murata@nifty.ne.jp  
TEL/FAX: 0474-23-5475  
〒273-0865 船橋市夏見 4-9-5

\*\*\*\*\*

### 第9回 JACET 春季英語セミナー

テーマ:  
コミュニケーション能力の開発  
—英語授業の活性化

主催: 大学英語教育学会 (JACET)  
事業委員会  
期日: 3月28日 [火] 10:00-17:00  
(懇親会、午後7時まで)  
場所: 立教大学 太刀川記念会館  
(JR池袋駅西口徒歩5分)  
内容: 特別講演「英語教育の最近の動向」  
(小池生夫会長)  
他講師: 神保尚武氏 (早稲田大学)、小林ひろ

み氏（文教大学）、蒔田守氏（筑波大学付属中学）、山岸信義氏（聖徳大学付属高校）  
募集人員：50名（定員に達し次第締切）  
参加費：7000円、懇親会無料  
対象：英語教育に関心を持つ者  
申込み期日：3月23日（火）  
連絡先：大学英語教育学会（JACET）  
TEL: (03) 3268-9686  
FAX: (03)3268-9695

ともあり、英語の早期教育論議も盛んです。  
…」  
（毎日新聞 HP より）  
HP アドレス：  
<http://www.mainichi.co.jp/eye/debate/index.html>

♣TOEFL 平均点やっと最下位脱出  
初の500点台 英語「公用語」夢のまた夢か  
（朝日 00.01.26）

♡教育基本法改正論議へ（朝日 00.01.25）

### <海外学会情報>

◇TESOL 2000 Navigating the New Millenium  
March 14-18, 2000 at Vancouver

## お知らせ

### 「JACET 基本語」改訂のための プロジェクト・チーム発足

『JACET 基本語 4000』を根本的に改訂するために本部研究企画委員会内にプロジェクト・チームを作る計画があります。今年の5月の発足を目指しています。会合をもつよりもメールでの会議が多くなります。実際の労働よりも基本語、語彙表の紹介、作成法、語彙習得等について積極的に発言される委員を望んでいます。E-mail での交信ができることが条件です。問い合わせは下記をお願いします。

（村田年・千葉大 [minoru.murata@nifty.ne.jp](mailto:minoru.murata@nifty.ne.jp)）

## 最近のニュース

### <国内外語教育関連>

♣「21世紀日本の構想」報告書  
英語を第二公用語に（日経 00.01.19 他）

—これに関して、毎日新聞ホームページに多くの意見が掲載されています。（五十嵐理事）—

「小淵恵三首相の私的懇談会である『21世紀日本の構想』懇談会は、このほど提出した報告書で英語の『第2公用語』化も視野に入れた英語教育の拡充を提言しました。小学校の「総合的な学習の時間」で3年生から外国語の授業ができるようになったこ

### Main Articles in This Issue

Foreword (Ikuo Koike) -----	1
Report from JACET office ----	2
Chapter News -----	3
Reports from SIGs -----	6
Monthly Meeting Reports ----	12
Information etc. -----	14

### 編集：広報通信委員会

（担当理事：伊部、委員長：加藤）

慣れない編集作業で、早くから原稿をいただきながらも、例の通り遅れてしまいました。編集の都合で多少字句が変わっているかもしれません。御容赦下さい。

（1月号編集担当：大山、笹島）

2000年1月31日発行©

発行者 大学英語教育学会(JACET)

代表者 小池 生夫

発行所 〒162-0831 東京都新宿区横寺町 55

電話 03-3268-9686

FAX 03-3268-9695

<http://www.jacet.org/>

印刷所 〒228-0021 座間市緑ヶ丘 3-46-12

有限会社 タナカ企画

電話 0462-51-5775